I-9

特定のジャンルを主目的としたホールに関する研究

A study on halls which focus on supecific performance

○山本美優[1]，　堀切梨奈子[2]，　佐藤慎也[2]
Miyu Yamamoto[1],Rinako Horikiri[2],Shinya Satoh[2]

Multi-purpose halls can be used various performance. But it is not always good for all kind of uses. So new kind of halls appear such as variable halls, main-purpose halls. However the number of studies is not enough. It is considered meaningful to investigate and analyze the halls which focus on supecific performance. In summary, many of the main-purpose halls focus on music and many of the stage type are proscenium. I think it is important that grasp the characteristics of the main performance and have flexibility for another performance.

１.研究背景

多目的ホールとは、音響反射板を用いることによって、様々な活動をひとつのホールで行うことを目的としたものである。多目的ホールは様々なジャンルに対応できる一般的な機能を備えている場合が多く、全てのジャンルにとって高性能なホールとはいえない。多目的ホールからの脱却を目指し、主目的ホール[注１)]や可変装置を備えた超多目的ホール[注２)]と呼ばれる新しいホールが登場しているが、これらのホールに関する研究は、多目的ホールに比べて多くは行われていない。本研究は、特定のジャンルを主目的としたホールに関して、その設置傾向、立地等に関して調査を行い、今後ホールを計画、設計するにあたっての知見を得ることを目的としている。

既往研究には、大月らによる「オペラ主目的劇場に関する研究」[1)2)3)4)]や、森戸らによる「演劇を主目的とした劇場の空間特性に関する研究」[5)]があり、その空間特性を明らかにしている。しかし、その研究の数は少なく、特定のジャンルを主目的としたホールの全国における設置数、その傾向を調査、分析することは、今後のホールの計画、設計に対して有意義と考えられる。

２.研究方法と対象

ホールの設置年度、全国における設置数等を全国公立文化施設検索に載っている 2,180 件の施設に設置された、2,992 件のホールのうち、それぞれのホームページやパンフレット等に用途の記載があった 1,294 件の施設、1,824 件のホールを対象に調査を行い、その傾向や特徴を分析する。本研究における特的のジャンルを主目的としたホールとは、各ホールのホームページやパンフレットの目的や用途に「主目的」、「主に」等[注3)]の表記があるものを抽出する。

３.ホールの分類と設置年度

ウェブ調査の結果を単目的と複目的とその他からなる８つのジャンルに分類した（図１）。図２の設置年度の推移をみると、戦後 1960 年をきっかけに多目的に使えるホールが建設され始め、1990 年頃から専用ホールや主目的ホールの建設が始まったことがわかる。しかし、他のホールに比べ、多目的に使えるホールの数が圧倒的に多いのが現状である。

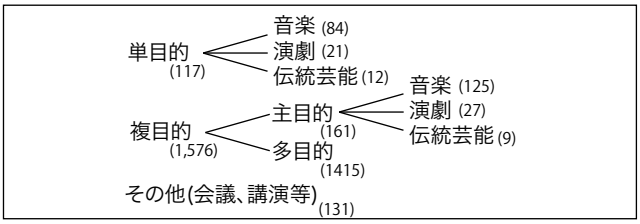

図１　ホールの分類

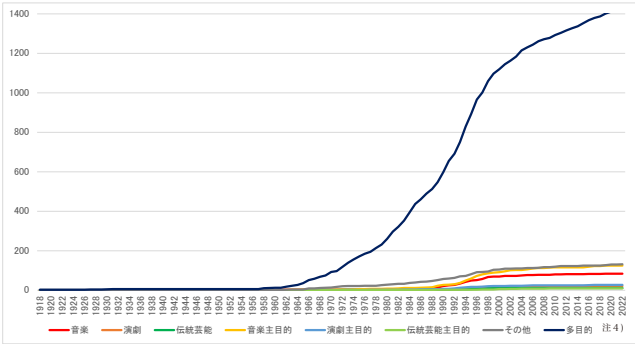

図２　ホールの設置年度推移

３.主目的ホールの立地

主目的ホールについて、都道府県別の設置の傾向に関して分析を行った（図３）。秋田、京都、香川、

1:日大理工･院(前)･建築　2:日大理工･教員･建築

和歌山、徳島、高知を除く 41 の都道府県に 161 件の主目的ホールがあることがわかった。

ホールの数が一番多い東京が、主目的ホールも一番多い。ホールの数が多い方が主目的ホールも多い傾向にあるが、神奈川、愛知、埼玉、北海道などの都市圏では主目的ホールの数は多くなく、多目的に利用できるホールの数が多いことがわかった。

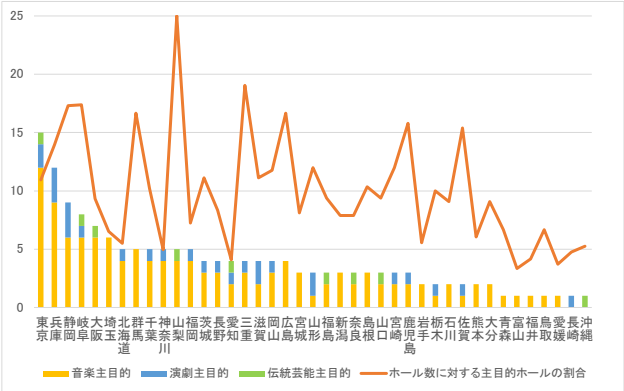

図３　都道府県別　主目的ホール数

４. 主目的ホールの特徴

主目的ホールの舞台形式、客席数について分析を行った。舞台形式の結果が図４である。どのホールに関しても、プロセニアム形式が一番多い。音楽専用ホールでは、シューボックス型が多いのに対して、音楽主目的ホールは、半数以上がプロセニアムであり、専用ホールと主目的ホールの違いが表れている。しかし、音楽主目的ホールでは、シューボックスや可変の舞台形式も多く、様々な舞台形式で対応できる可能性を示している。

次に図５の客席数についての結果をみると、演劇主目的ホールと伝統芸能主目的ホールは、ほとんどが 1,000 席以下の客席である。一方、音楽主目的ホールは、1,000 席以上の客席をもつ大規模なホールも存在している。演劇や伝統芸能などは、音楽に比べ演者の表情やセリフが聞こえることが重要であるため、小規模のホールが多いと考えられる。

５. 結論

現在建設されている主目的ホールの多くが、音楽主目的ホールであった。また、主目的ホールの舞台形式としてプロセニアム形式がよく採用されていて、シューボックス型に比べ、様々なジャンルに対応しやすい形式であると考えられる。また客席数では、演劇と伝統芸能主目的ホールでは、1,000 席以下の

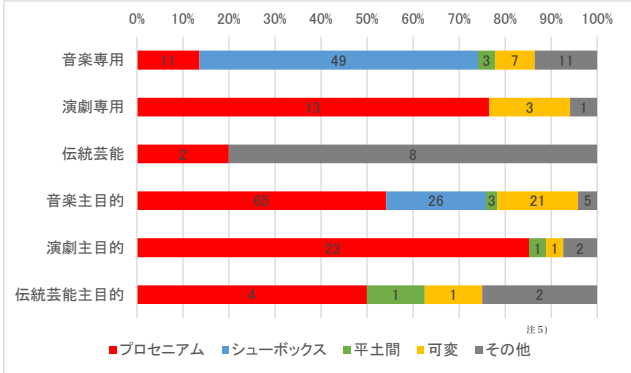

図４　舞台形式の内訳

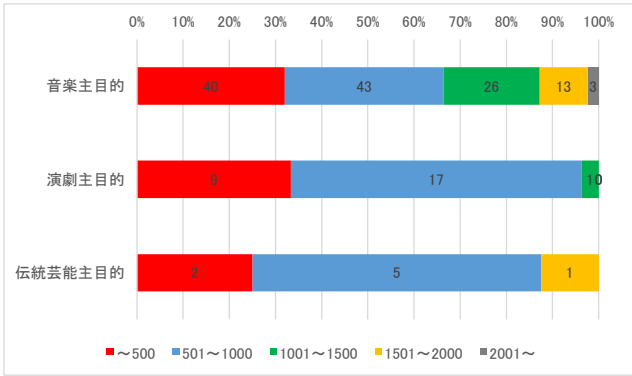

図５　客席数の内訳

規模のホールが多いが、音楽主目的ホールでは、2000 席以上のホールもあり、鑑賞者にとって見ることが重要な演劇や伝統芸能と、聴くことが重要な音楽というジャンルの違いの特性をみることができた。主目的のジャンルの特性を捉えつつ、舞台形式によって様々なジャンルに対応する工夫が重要だと考える。

【註釈】

注1)多目的ホールのうち、特定の目的を重視し、それを上演するためにふさわしい設備・空間をもつホールを主目的ホールとする。

注2)多目的ホールのうち、可変機構を用いてより多くの演目に対応できるようにしたホールを超多目的ホールとする。

注3)この研究における特定のジャンルを主目的としたホールは、「主目的」、「主に」、「主体」、「中心に」、「重点」、「重視」、「最適」、「適した」、「基本」等の言葉があるホールと定義する。

注4)この分類わけにおける多目的とは、用途が複数記載されているものとする。

注5)「その他」には、アリーナ型、セミスラストステージ型、能舞台等を含む。

【参考文献】

1)大月淳、清水裕之：オペラ主目的劇場に関する研究1－舞台とスケジュール－，日本建築学会東海支部研究報告集，pp.521-524,1995.2

2)大月淳、清水裕之：オペラ主目的劇場に関する研究2－愛知県芸術劇場大ホールの多面舞台の使われ方について－,日本建築学会大会学術講演梗概集,pp.373-374,1995.8

3)大月淳、清水裕之：オペラ主目的劇場に関する研究3－愛知県芸術劇場大ホールの吊物機構の運転状況－,日本建築学会東海支部研究報告集,pp.649-652,1996.2

4)大月淳、清水裕之：オペラ主目的劇場に関する研究　4－愛知県芸術劇場ホールの床機構の使われ方について－,日本建築学会大会学術講演梗概集,pp.415-416,1996.9

5)森戸大輔、浦部智義、積田洋、竹本俊治：演劇を主目的とした劇場の空間特性に関する研究,日本建築学会大会学術講演梗概集,pp.351-352,2003.9